

思想と酩酊体質

けんじょう よしかず
権丈 善一

商学部助教授



神さまは二種類の人間を作った——思想に酔える酩酊体質の人とそうでない人という表現をしばしば用いたのは、司馬遼太郎さんである。彼の未公開講演録のⅢ巻に「学生運動と酩酊体質」という講演が収められている。そこに、河上肇というたいそう偉い先生の話がでてくる。日本にマルクス経済学をひろめた経済学者と評価されている先生であるから、そうとうに偉い人であることは想像がつく。手当り次第に本を読んでいた学生の頃、彼の「貧乏物語」などにも目をとおしていたので、司馬さんの講演録をバラバラとめくっている時に、ふとそのページに目がとまった。

当時から、私は、河上先生の書くものはどうにも重い、書物だけではなく、その人生までが重すぎると思う反面、こうまで、正しいことはコレだ！と思い込んで行動できる性格が、なんともうらやましいというような、そんな印象を抱いていた。そうしたなか、先の講演において司馬さんが河上先生を評する文章——「河上さんは、もともとお酒に酔う、思想的に酩酊する必要がある体質でした。河上さんの場合、いろいろな思想が入ってきては、抜けていきます。たとえば宗教に入信したり、社会主義を展開したり、マルキストになったりと、さまざまな思想が河上さんの中を通り過ぎていく。変質などという言葉は当たりませんね。日本酒がウイスキーに変わっただけのことであり、酒には変わらない」という文章を目にした。これを見て、なにやら合点がいった。

私の専門の社会保障の動きをみてみると、この政策を動かす思想の力というものをはとほと感じ入る。そして、私が社会保障を研究する際にベースとしている経済学は、実は、多くの思想家を生みだしている学問領域であり、経済学には、思想で区分された何々学派というものが、けっこうある。しかし、それぞれの学派が主張する、コレこそが正しい！と思わせてくれる酒に、私は、どうにも酔えない体質のようなのである。河上先生のように酔える体質の人を、とでもうらやましく思えるけれども、それは無理。ならば、宴会の最後に一人酔わずして傍観しているような、冷めた嫌なやつに徹するという生き方もあってよいだろうとも思えてきた。もつとも、思想を酒にみためた司馬さんの喩えは巧みではあるが、私にとって、思想は思想………